

西南女学院中学校・高等学校の中期計画（2022-2026）

西南女学院中学校・高等学校では新型コロナウイルスの感染が広まる中で、特に生徒募集の面で苦境に立たされている。特に、2019年から始まる新型コロナウイルス感染による長期に渡る休校のなかで、Wi-Fi環境の設備が能力不足でオンライン授業の対応が十分にできなかったこともあり、一昨年度にICT環境整備に力を入れてきたライバル校に生徒募集の面で逆転され、昨年度は更に水をあけられることになった。

一方、校内における教科指導や読解力育成等の良い成果は、進路実績や数々の入賞実績に表れている。特に進路実績は、生徒募集の結果を大きく左右するので、よりハイレベルの実績を目指さなければならない。本校の場合、私学の進学実績については地域にける他校に見劣りするものではないが、地域においては国公立大学志向が強く、国公立の進路実績の向上も目指さなければならない。2025年度からは共通テストにおいて、「情報」が受験必須科目になるが、それに耐え得る指導ができる教員の確保が課題である。

本校が地域の大きな信頼を得ている人間教育の土台であるキリスト教教育については、2021年度は全体礼拝を1度も対面で行なえなかったにもかかわらず、その成果は礼拝に臨む生徒の様子のみならず、生活態度と学習に取り組む姿勢に明確に表れている。来年度は、Wi-Fi環境が各教室に整うことから、そのことを念頭に学校の「商品」に当たる「教育」の開発、並びに改善と向上、魅力的で地域に信頼される学校づくり、そしてそれらの宣伝に当たる「広報戦略」についての中期計画を示す。

[I]本校の「教育」

①人間教育

・ **人格教育**……キリスト教教育（聖書に基づく人間観、社会観、人生観、生命観、倫理観等を教える教育）

(i) **礼拝**：神に喜ばれる精神を宿し、行動できる人間、即ち、本校の建学の精神「感恩奉仕」が身につくことを目的とする。また、自己肯定感が希薄にならざるを得ない社会環境の中で、生徒一人ひとりが生き生きと積極的に生きていけるよう自己肯定感を醸成し、結果「奉仕」の実践者となることを目指す。具体的には、週1回の全体礼拝(英語礼拝を含むが、特にキリスト教信仰を意識したミッションマンズ、キリスト教の教えを深く読み解くミッションウイークの設置)、毎日の始礼・終礼のクラス礼拝を充実させる。

(ii) **聖書の授業**：聖書の歴史的背景、存在の意義、内容の意味などについて学ぶことを目的とする。具体的には週当たり1時限、学校が定めるカリキュラムのもとで、宗教部が管轄し、近隣の教会の牧師に講師を担っていただき、聖書について歴史や内容の学習をする。

(iii) **キリスト教会との連携**：生徒が教会で学校とは違った聖書の学びをすること、年齢が異なる方々と交わること、信仰を持つ人と同じ空間と時間を共有すること、社会の様々な状況を学ぶことなどを目的として、日曜日の主日礼拝に出席することを奨励している。このことは、生徒に大きな人間的な成長をもたらしているが、現在、全校生徒の3割が主日礼拝に皆勤で出席している。これは、国内のキリスト教学校では稀有のことであるが、もっとこの割合を上げていきたい。そのためには、教員の

教会出席が不可欠であり、より強く奨励をしていく。

(iv) 人権教育との融合：2021年度から人権教育とキリスト教教育を融合させ、生徒が今まで感じていたであろう2本立ての倫理・道徳教育を1本化し、キリスト教教育が人権教育であることを自覚させ、中高生の人権意識を高めることを目的とする。具体的には人権教育推進委員長は宗教部の所属とし、「人権教育」を絶対平等を説くイエス・キリストの教えと重ね、人権教育をキリスト教教育の一環として行なうことにする。

(v) 職員のキリスト教教育の意識の醸成：本校の土台であるキリスト教教育を全教員で推進するためには、教員一人ひとりがキリスト教教育を行っているという自覚と、キリスト教、キリスト教教育に対する理解が是非とも必要である。そのためには、これからも就職3年目までの教員には参加を義務付け、その他の教員は自由参加という形で「キリスト教教育オリエンテーション」を万難を排して持続していく必要がある。合わせて、教員一人ひとりが地域の教会の主日礼拝に出席し、教会での奉仕活動をすることを奨励していく。

(vi) 平和祈念礼拝の実施：キリスト教教育の大きな使命として「平和を作り出す人」の育成がある。過去の戦時禍で具体的な経験をした方のお話を聞き、教員と生徒一人ひとりが悲惨な経験を自分のこととして「平和」を考え、「平和」を祈り、「平和」に向かう行動ができるように、夏期に全体礼拝として「平和祈念礼拝」を特別に設ける。

(vii) 施設訪問等：久山療育園や老人ホームへの訪問して、そこにおられる方々との触れ合い、職員の方々との触れ合いから、生徒は本当に大きなことを学んでいる。コロナ禍における訪問は難しいが、安易に中止にせず、あらゆる可能性を模索する。

・**女子教育**……日本においては、世界から指摘を受けているように女性の社会的地位が低く、世界経済フォーラム(WEF)の2021年版報告書では、日本は世界153カ国中120位であった。このような結果からも分かるように、日本においては男女共にジェンダーギャップに対する感覚が総じて鈍いことが分かる。このことから、女子高である本校では、生徒に「女性がどうあるべきか」、「社会の中で女性はどうか」、「社会は女性に対してどうあるべきか」ということを学ばせ、自律して社会活動に参画し、積極的に活動していくことの出来る社会を創造できる女性を育てることが求められている。このため、まずは、教員の基礎知識の習得はもちろんのこと、女子教育に対する意識を高め、外部講師等を招くなどして、生徒自身の意識改革・意識変容を促す授業を実践していく。

②**キャリア教育(「なりたい私」を育てる教育)**……現在、コロナウイルスの影響もあり、生徒が職業体験をする機会が殆ど得られていない。また、指導要領で学習意欲の低下が指摘されているように、現在の生徒の傾向として、労働や奉仕の意欲も一般的に低下している。加えて、友だちづくり、他者との会話や対話など、他者と交わること、関わるのが苦手な生徒が全国的に増加しており、本校もその例外ではない。しかしながら、本校ではキリスト教教育の実践と女子ばかりであるという状況もあ

って、多くの生徒が、学校生活を経るに従ってコミュニケーションを図る意欲を高め、積極的に他者と交わり、良い関係を持つことのできる生徒に育っている。従って、本校の場合は、コミュニケーション能力の育成に加えて、具体的な進学意欲と社会活動への参画意欲を育てることにより、中高での学びと、更にその先での社会活動のモチベーションをあげることができると考える。従って、次のことを行う。

(i) エナジード：中学校では自分の力、自分の適性や志向などに照らしながら、自分の未来を設計し、行動を起こすことを目的とした株式会社エナジード製のキャリア教育プログラムを使いインテグレーションの授業の中で実施していく。また、この学習を教科学習のモチベーションに繋げる必要がある。

(ii) キャンパスツアー：生徒の具体的な大学進学イメージをより明確にしてもらうために、大学を訪問して、現地での学校説明会、見学などを積極的に進める。

(iii) 大学入試説明会の積極的開催：多くの生徒に、今、大学で学ぶ学問がどうなっているのか、どのように学ぶのかを積極的に知ってもらい、具体的に大学選びができるようにしていく。

(iv) 積極的に出前授業を受ける：学習が得点を取ることを当面の目的としたり、受験勉強に偏りがちな漠然とした学習になりがちなか中、大学でのアカデミックな学びを知り、生徒には現在の自分の学びの内容と方法を自己検討と改善をしてもらい、大学進学への意欲を強化する。

(v) 西南女学院大学との高大連携授業の実施：授業で西南女学院大学の先生方に授業をしていただき、併設大学での学びを知ると同時に、併設大学の魅力を知ってもらい、同時に進学意欲を育てる。

(vi) 外部行事への積極的参加：「北九州ゆめみらいワーク」など、外部でのキャリア教育を目的とするイベントには積極的に参加し、生徒に本校が「外に開かれた学校」というイメージを持ってもらうと同時に自分の志向や適正に目をむけて、「なりたい私」を思い描くよい機会にしたい。

(vii) 卒業生講和の実施：本校の卒業生は、西南の学校文化を良く知っているし、生徒も卒業生に親しみを感じるので話の内容が生徒にとっても伝わりやすい。卒業生がそれぞれの仕事をする中で、社会人として大切にしていること、中高時代に身につけたことが今どのように繋がっているのか等を話していただくことで、キャリアの視点から生徒一人ひとりに学校と中での自分の学びを見つめなおし、日々の学校生活の質向上に繋げてもらいたいと考えて実施する。第一志望の大学に合格した新卒の生徒による講演も、在校生にとっては大きな刺激になっているので、これからも続けていく。

(viii) 受験意識の醸成：生徒に早期から「大学受験」の意識を醸成し、学習の一つのモチベーションとすることが大切である。そのためには、生徒の学習状況を細かく把握し、苦手意識をそのままにせず、統合学力の視点から指導を行っていく。このことが、結果的には国公立大学の受験に繋がり、受験校の幅を拡大することに繋がる。

③AIE（国際化教育）・英語教育

・「使える英語力」の育成

- (i) 1年生はSSH（Sound Spelling Harmony）,BBカードを用いた「英語」の導入
- (ii) 英語イマージョン教育の実施（1,2年）
- (iii) 3年……オーストラリア語学研修旅行
- (iv) 4年でのAIEプログラム（英語イマージョン・キャリア教育）の実施
- (iii) 5年……セブ島英語語学研修旅行
- (iv) 英語暗唱、英語スキット、英語スピーチ、英語パフォーマンス、英語ディベート、英語礼拝の取り組み
- (v) リビングトーキング（英語を母国語としない方々との英語によるコミュニケーションをとる授業）
- (vi) 英語検定試験、GTECの全学での取り組み
- (vii) 短期(1～2週間)、中期(1学期)、長期(1年)の留学制度を整備

・国際感覚の醸成

- (i) 韓国 貞信女子中学校と姉妹校提携（留学生の相互受け入れ）
- (ii) 外部講師による「国際」についての講演会を年1回開く
- (iii) 積極的な留学生の受け入れ

④進路実現（「なりたい私」になる）のための教育と指導体制

・統合学力教育（各教科学力が統合された総合学力を、一人ひとりの生徒の学力として育てる教育）

(i) **インテグレーション・総合表現**：共に、内容としては教科横断型授業であり、特にインテグレーションは教科枠を超えて教員が一斉に行なう授業であり、特にプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・ネゴシエーション能力（交渉力）・表現力・文章力を総合的に育てることを目的としている。

(ii) **進路実現に向けての「進路学力検討委員会」の設置**：学年やコースに所属する生徒の授業を担当する全教員が集り、生徒一人ひとりの進路希望が実現されるよう教科のみならずあらゆる立場から様々な検討をする会であり、過去の実績に則り、定期的に開催して生徒の確実な進路実現を目指す。

⑤読解力（文章力）育成

スマホが普及する社会になり、生徒の活字を読む機会が圧倒的に減り、SNSなどでやり取りをする文章が極めて簡略化されたり、仲間同士にのみ通用するワードを用いた閉じた情報交換がなされるようになり、初等的な日本語の文法が身につけていない生徒が増加しつつある。語彙力の乏しさも大きな問題として浮上している。このことは、思考力の低下に直結している。

また、自分の欲しい情報のみを得ようとするために情報不足となり、常識的な社会知識が乏しい生徒が急増している。AIの時代に備える上でも、何が書いてあるのか、何が言いたいのか、何を伝えたいのか等、文章を読む・聞く・書く能力が何よりも重要と考える。また、文章の読解力、文章作成能力は論理的な思考力そのものであると考えるので、本校では、今までにもまして効率的に下記のことに取り組む。

- ・**コラム学習**：新聞のコラムを利用し、語句の習得、語句の理解を経て、文章の理解、文章の要約、感想や意見の表明までを行なう学習。
- ・**「論理コミュニケーション」の取り組み**：「論理コミュニケーション」とは、慶應義塾大学 SFC 研究所開発による、社会に出て必要なコミュニケーション力を育てる教育プログラム。コミュニケーション力を「聴く力」、「構築する力」、「伝える力」の3階層に分割し、課題についての文章を読む、聞く・そして書くことをしながら、コミュニケーション力をつけていくというもの。
- ・**NIE「いっしょに読もう新聞コンクール」への取り組み**：本校のコラム学習や「論理コミュニケーション」によって身につけた読解力や文章力、コミュニケーション力を試すために、実際に全国スケールのコンクールでの課題に取り組み、ついた力を検証する。今までに、成果として全国最優秀賞2度、福岡県最優秀賞2度、優秀賞多数を獲得している。

⑥ICTを用いた新しい形のアクティブラーニング

・**「学びの共同体」**……本校では、来年、各教室に Wi-Fi が整備されることから、佐藤学が提唱し、今、先進的なグループワーク、新しいアクティブラーニングとして世界に広まっている学習形態である「学びの共同体」を導入する。この学習形態は、コロナ禍の中でも実施できる唯一のグループワークという検証も行なわれており、実施についてコロナ禍などの社会状況に左右されることがないのも導入理由の一つである。

⑦職員教科指導・指導方法の研修の強化

昨年度から、政府主導の入試改革が行われ、特に今年は大変大きく表れた。社会の変化に伴い、大学も受験生に要求する学力が大きく変わりつつある。総合的な入試問題を課す大学も増えてきた。これらの傾向を踏まえて、入試問題研究などの各教科と、教科間の連携を密にする合同教科会など、受験を意識した教科会、教科指導の研修会を積極的に開き、情報交換を密にする。

【Ⅱ】地域から信頼される学校づくり

地域において本校は「女子の進学校」という認識は定着していることから、地域に信頼される学校とは順に ①進路実績があり進路保障の面で安心して通わせられる学校（進路保障） ②人間教育について安心できる学校（人格教育） ③教員の教科指導や生活指導のスキルが高い学校（指導力の充実） ④教育環境が整っている学校（安全・安心） ⑤開かれた学校（地域の学校）ということになる。

①については、現在のところ卒業生の数からいえば、かなり良い進路実績をあげていると言ってよいだろう。本校では進路実績を上げるために入試問題研究、ハイレベルな入試に対応できる授業の研究などを充実させており、その成果をあげている。②については、中学校や塾への訪問から知る限り、本校に対してキリスト教に基づく人間教育に対し、大きな期待と信頼が寄せられていることが分かる。また、虐めや人間関係の拗れについて、常に迅速かつ丁寧に対応できるシステムが校内に出来上がっているため、より安心して学校生活を送れるよう何時でもシステムが有効に働くようにしておかなければならないと

考えている。③については、年度単位での教員の入れ替わりが大きく教科指導力にムラがあるのが実情なので、授業力向上のために、毎週教科会を開いて課題の抽出などを行なって丁寧に改善策を探っている。その成果の発表の場として各教員は年 1 回の全教員に公開する研究授業を義務付けられており、全ての授業において常に生徒が満足できる授業内容の充実とともに適切な実施の努力をしている。また、各学期末に生徒から授業アンケートを取り、それに基づいて各教員が細やかな授業改善に取り組んでいる。一方、現在、どの学校でも教科教育以外の知識とスキル、即ち心理学（人間、社会）、生徒の置かれている社会状況や家庭状況に応じて対応できる柔軟な対応力が問われているが、「チームで生徒を育てる意識」を醸成していかなければならない。もちろん、全ての教員のキリスト教教育に関わる意識の充実も欠かせない。④については、空調を含め快適な教育環境の整備に努め、IT を用いた先進的な教育が行なわれるような機器環境の整備も必要である。⑤については、市内の中学校や高等学校のバスケットボール大会の会場や、地域の教会のレクリエーションの会場、また卒業生の活動のための施設として積極的に貸し出している。セキュリティの問題もあるが、もっと外部利用を積極的に受け入れることにより、本校がより地域に対して開かれているというイメージを地域全体に持ってもらう必要がある。また、従来から伝統的に夏休み期間に「英会話教室」（低学年・高学年）、理科実験教室など地域に向けた児童向けのプログラムを行っており大好評である。2 年間コロナ禍で開けていないのは残念であり、オンライン等で開けないか検討をしていく必要がある。また、年に数回、男女関係なく児童向けの「バスケットボールクリニック」を行っており、これも好評である。地域から、本校が地域に貢献する学校であると認められること、低学年の児童から大人までに本校の存在を意識してもらうことは、本校が「地域の学校」であることの基本であると考えます。

【Ⅲ】生徒の満足度が高く魅力的な学校づくり

生徒にとっての魅力的な学校とは順に ①先生が丁寧で優しく寄り添ってくれる（教員への信頼）②友人関係が良くて学校生活が楽しい（良好な人間関係）③授業が丁寧で分かりやすく楽しい（授業の充実）④各教科の学力（実力）が身につく（学力の醸成）⑤ 教育環境が整っている（IT、実験、実習の充実した設備）⑥楽しい学校行事が多くある（集団で成す充実した行事が多くある）⑦行事意外でも様々なことにチャレンジできる機会が多い（自己啓発）⑧授業外の活動が充実している（部活動等）⑨学校生活を送るための設備が整っている（施設の充実）⑩他校にない独自の魅力ある制度がある（例外的制度）となる。

この数年来は、特に①～④の充実を図ってきたが、これからも若い常勤講師の入れ替わりが多くなることが予想されることから、より一層の教科会・研修会の充実が欠かせない。また、⑤については、2022 年度から Wi-Fi が各教室に整備されることから、ICT を用いた本校独自の授業形態を開発し、授業公開など地域に向けて研究発表や実践の公開をしていきたい。

⑥、⑦については本校は他校に比べて劣るものではなく、むしろ優れていると思うが、外部から⑧が弱いという指摘があっている。特に、本校の場合は運動部の活動が下火であり、かつてのように「部活動のために学校に通っている」といった生徒が激減している。他校のように部活動を活性化するために、中心となる新しいクラブ（例えば女子サッカー部）を作るのも一つの考えではあるが、初期投資が高額であることと、経費を含め持続的な経営の計画が難しい。また、現在、強硬に進められている全国的な「働き方改革」との整合性がどう取れるのかも不安である。従って、⑧については、まずは各教員に単に現クラブの「顧問」としてだけでなく、「部活動」は募集戦略の一つであるという自覚を持っていただくように

し、社会の動静を見極めて生きたい。⑨についてはより快適な生活環境と学習環境を充実させていかなければならない。⑩については、私服登校や校則の大幅緩和などの検討をする余地が十分あると考えるので、来年度から広報部が刷新されることから、生徒からの情報も収集して、多めに議論をしながら立案し、実施していきたい。

【Ⅲ】生徒募集戦略（中学校、高等学校別）

【中学校の地域と本校の現状】北九州地区では私立中学校受験者総数は減少を続けており、ようやく底を打った感があったが、コロナ禍が更なる受験生の減少を引き起こしている。そうした中、北九州では自由に高校受験ができる私立中学校が受験数を伸ばし、一貫校の場合は独自の入試制度（自己推薦・学費全額無料・奨学金給付等）を持つ学校が受験数を増やしている。もちろん、進学実績も重要なファクターであることは間違いないが、「高校受験を縛られないこと」、「お金がかからないこと（獲得できること）」の二つが受験校選びのキーになっている。

本校の募集状況から行くと、近年際立っているのは、入試成績の下位者の入学が極めて少なくなっていることである。それらの児童は他校に合格していつていると思われるが、何故本校を選ばないのかを知る必要がある。塾訪問等を丁寧にして調査したい。

本校の場合も募集対策として特別奨学生制度を持っているが、他校のように一クラス全員6ヵ年授業料無料といった規模には遠く及ばない。また、本校生徒の6ヵ年の成長から、生徒を6年間かけて育てることの重要性がはっきりと見えるし、本校が高校受験を自由にしてしまうと高校進学の数が減ることが考えられるので、経済的な経営の面からも一貫の立場を崩すべきでないとする。そういうことから、とにかく本校の実績や特徴を丁寧に、また、より広範囲に伝えていく必要がある。福岡県全体では女子校の進学校の全てが生徒募集で苦戦を強いられているが、逆に女子校だからこそあるメリットと女子教育の重要性を含め、しっかりと理解してもらえるように広報していく必要がある。

【高等学校の地域の現状】高等学校は、少子化の中、公立・私立とも熾烈な生徒の争奪戦が行なわれている。中でも、生徒募集のために公立高校の場合は「特色化入試」、私立高校の場合は「推薦入試」という名のもとで、中学校時の成績と面接のみで「入学試験を課さない入試」が行なわれ、結果、多くの生徒を集めている学校が多数ある。一方、高い進学実績を誇っているいくつかの私立高校は、授業料を全額無料にしたり高額奨学金給付するクラスやコースを設け、そこへ入学した生徒には入学後にも難関大学への進学支援を更に手厚く行うことで実績をあげている。また、これらの学校は一度の入試で様々なコースを同時受験したとみなし、高校そのものには不合格にならないような仕組みにしており、結果、多くの入学生を獲得している。従って、高等学校の場合は、「高い進学実績」、「必ず合格すること」、「無試験」、「お金の提供または無料」が四つの受験校選びのキーになっている。このようなことが、福岡県においては学習に対する姿勢と学力について、極端な二極化をひきおこしていることは言うまでもない。

一方、高等学校では全国的な「就学支援制度」が整備され、家庭収入額にもよる制限はあるが、私立と公立の学費の差が僅差となり、かつて「公立だから」という根拠があった学校選びの理由はかなり揺らいでいる。しかしながら、コロナ禍の経済的影響と思われるが、通学費がかかる学校は敬遠する傾向が出てきており、近場ということも学校選びのキーになりつつある。また、中学校と同様、女子校は生徒募集で苦戦を強いられている。

中学校と同様、本校の場合も募集対策として特別奨学生制度を持っているが、他校のように一クラス全員とか一コース全員といった規模には遠く及ばない。しかしながら、現在、一般中学校からの入学生が少しずつ増加しており、また優秀な生徒の入学者が増えている。高校の場合、オープンスクールに参加した生徒の受験率、入学率が高いが、本校の進学実績や校風が効果的に働いていると思われる。そういうことから、本校の実績や特徴をあらゆる機会に、丁寧に、より広範囲に、効果的に伝えていく必要がある。福岡県全体では女子校の進学校の全てが生徒募集で苦戦を強いられているが、逆に女子校だからこそあるメリットを、女子教育の重要性を含め、しっかりと理解してもらえるように広報をしていく必要がある。

・**本校の地域にアピールできる実績や特徴**：① 国公立を含む高い進学実績 ② 圧倒的な指定校の質と数 ③併設大学があることによる進路保障 ④英語教育並びに国際化教育 ⑤先進的なキャリア教育と統合学力教育 ⑥生徒の学びに向かう姿勢 ⑦穏やかで自由闊達な校風（生徒と教員の信頼関係・生徒同士の良い関係・教員の丁寧な個人指導・キリスト教教育が醸成するあたたかい雰囲気）⑧人格教育（キリスト教教育）

・**広報活動**：今までも広報活動は行なってきたが、現在の募集状況からみて不十分であることは明らかである。まずは、本校の広報活動を内と外から見直し、それに基づいて早急に改善と実施を行なっていく。特に、本学院のアドミッションオフィサーである渡邊義隆先生の指導を仰ぎ、また Every Kikaku の本村雄二先生のアドバイスをいただきながら、積極的に進めていきたい。特に、西南女学院中学校・高等学校の存在を本校ならではの進路実績等「内容」と共に地域に広く知らせ、現在ある女子高離れを、女子高であるが故のメリットを伝えることにより学校選びの選択肢の一つに加えてもらえるようにすることも重要だと考える。高校については、当面は、特に交通費があまりかからない小倉北区、戸畑区、八幡東区、小倉南区の一部を募集強化地域にしていく。

(1) 校内 PR イベント

- ・**オープンスクールの再構築**：全体として、参加者にウケル内容、デザインにしていくことに心がける。また本校の教育の成果である「生徒」を全面的に押し出すようにする。また、本校の保護者の授業参観などとオープンスクールを合体させ、在校生の保護者にも本校の PR の一端を担っていただくことが効果的であると考えている。また、複数回のオープンスクール内容を全体で一つとしてデザインし、次回も来たいと思わせるようにしていく。また、担当する教員のプレゼンテーション能力を向上させていく。
- ・**クリスマスカルチャーシェア**：大変人気のあるイベントであることを利用し、生徒をもっと全面的にフィーチャーし、地域の児童たちの本校に対する進学意欲を高める企画を行なう。
- ・**オンラインオープンスクール**：今後もコロナウイルス感染拡大のためにオンラインでのオープンスクールを開かざるを得ない状況も考えられるので早めに準備をしておく。その際、生徒にも参加を呼びかけることが効果的であると考えている。
- ・**入試結果報告会**：内容を再検討し、「入試対策講座」に繋げる内容に変えていく。
- ・**入試対策講座**：この会に、できるだけ多くの生徒を呼び集めるかが受験状況を大きく左右するだけに、この講座に出席するメリットをもっと大きくする必要がある。
- ・**塾対象学校説明会**：現在、北九州の私立中学校では、最も多くの参加数を得ている。コロナ禍で中止せざるをえないこともあるだろうが、塾との良いつながりを維持していくための代替の会を常に企画していく。

(ii) 広報ツール

- ・**学校案内パンフレット**：現在、中学学校案内パンフレット・高校学校案内パンフレット・生徒制作パンフレット学校案内パンフレットの3種類を全教研との共同企画で作成しているが、概ね好評である。特に生徒政策パンフレットが好評であるが、特に広範囲にわたって配る可能性を探っていく。
- ・**入試問題集**：早期に準備をし、本校に興味ある児童や生徒に入試問題を早期に見せ、それについての説明や解説の企画などをオープンスクールの中に入れ込んでいくことで、本校の受験のモチベーションをあげていきたい。
- ・**スクールガイド**：進路実績の結果と共に、本校に入学した生徒の成長の様子、進路の可能性など詳細に分かりやすく掲載する必要がある。また、卒業生のコメントなども数多く載せていく。

(iii) 校外情宣、資料配布

- ・**チラシ等**：各イベントについてのチラシや情宣フライヤーの内容については特に問題はないと考えているが、実際にどれだけの範囲に配られているのか、実際にどれだけの人が実際に内容までをきちんと読んでくれたのかが問題である。コロナ禍で訪問の機会が減り、滞在の時間も短くなっているが、できる限り実際に訪問し、簡潔に内容説明を重ねていく。
- ・**私学展**：多くの学校が集まって開く会であるがゆえに、訪れた児童や生徒の注目を引く企画が必要である。オープンスクールの規格と合わせて考えていく。

(iv) 訪問企画と資料配布

- ・**塾訪問**：現在、塾との関係は良好で、塾からは本校の教育に対して、概ね高い評価を得ている。しかし、進学実績等を見せると驚かれることもあり、情報が十分に伝わっているとは言いがたい。従って、これからは、訪問回数を多くして、相手の知りたい内容を簡潔に説明し、何故本校が受験校として十分な受験数を得られないのか、受験生は何を求めているのかという情報を十分に収集して、募集活動に生かしていく。また、本校のメリットを十分に説明しながら、塾生に受験を促すようにお願いしていく。
- ・**中学校訪問**：特にアドミッションオフィサーである渡邊義隆先生のお力をお借りして中学校訪問を行い、本校の「内容」について十分に聞いていただきながら、中学校主催での学校説明会に加えてもらえるようにしたい。一方で、特定の学校への進学を勧めないという方針の中学校も出てきており、その際は、生徒の本校のオープンスクールへの参加を勧めてもらえるように、担当の先生方に本校のことを丁寧に説明して理解してもらえるように努める。
- ・**教員の広報スキルの向上（研修）**：今までも塾訪問や学校訪問は数多くしてきたのに、十分に効果が上げられなかった一つの要因として訪問する教員の訪問スキルがあると考えられる。欲しい情報を気持ちよく受け取っていただき、本校の受験を勧めてくれるようにするためには、どのような方法が最良なのかをきちんと研修する必要がある。そのためには、まずは、本校の教育の深い理解、成果の意味と意義の認識、説明をするモチベーションの高揚、相手が欲しい情報の的確な判断、対応の仕方と時間の使い方等々を身につける必要がある。外部講師による研修も考えたい。

(v) 地域に向けてのオープンイベント企画

- ・**サマースクール**：地域における本校の存在感を示すことと、早期からの生徒募集という意味合いを

兼ねて、長年に渡って行なってきた企画である。小学生対象の低学年向け「英会話教室」、高学年向け「英会話教室」、「理科実験教室」は従来通りの実施ができればよいと考えるが、冷暖房設備の状況からくる「理科実験教室」を行なう場所の問題を解決していきたい。また、現在の「教室」以外で、地域の小学生がもつめる企画についての情報を集めて、新たな企画を考える。

- ・ **バスケットボール教室**：「バスケットボール・クリニック」は毎回大好評であるが、企画運営のためには予算がかかるが、続けていくべきであるとする。実際に、生徒募集にどれぐらいの効果を発揮しているかという問題もあるが、本校が地域の学校であるという存在感を示すためには、大変有効なイベントである。

(vi) 生徒数を増やす新しい試みの検討

西南女学院はせっかく幼稚園、中高、大学・短期大学部を擁しているのに、そのことが大きく生徒募集に関わっているとはいえない。例えば、西南女学院大学と連携して、新しい魅力作りをして、高大接続のコースなどを高等学校に作るようなことを検討しても良いのではないだろうか。地域において「就職の良い大学」としての認識があるだけに、進路保障の観点から地域の中学生にとって魅力的なコースになりうると考える。